

Factors associated with independent ambulation at 3 months after putaminal hemorrhage: an observational study

Noriko Ikeda, PT, MSc1)*, Masaru Sakurai, MD, PhD2), Emika Yamada, PT2), Soichiro Gotoh, PT2), Nozomu Tanabe, MD, PhD3), Yasuhiko Hayashi, MD, PhD4), Isao Matsushita, MD, PhD3) 1) Department of Rehabilitation, Kanazawa Medical University Hospital: 1-1 Daigaku, Uchinada, Ishikawa 920-0293, Japan 2) Department of Social and Environmental Medicine, Kanazawa Medical University, Japan 3) Department of Physical and Rehabilitation Medicine, Kanazawa Medical University, Japan 4) Department of Neurosurgery, Kanazawa Medical University, Japan

要約

【目的】本研究の目的は、被殻出血後3ヶ月の歩行予測臨床指標を評価することである。

【対象と方法】被殻出血患者84名（男性51名、女性33名、平均年齢 60.7 ± 10.0 歳）を対象とした。患者特性および被殻出血発症時のCT所見等はカルテから抽出した。その他、意識障害、片麻痺の重症度、高次脳機能障害、感覚障害、Activities of Daily Living（以下、ADL）、歩行能力を評価した。3ヵ月後の歩行に関連する因子を同定するためにロジスティック回帰分析を行い、同定された因子の予測値と最適なカットオフ値を決定するためにReceiver Operating Characteristic curve analysis（ROC解析）を行った。

【結果】脳室穿破、片麻痺の重症度（12段階の片麻痺機能検査を用いて決定）、およびFunctional Independence Measure（以下、FIM）の認知スコアは、歩行予後の独立した因子であった。麻痺の重症度のcut off値はGrade 6、FIM認知項目のcut off値は17.5点であった。片麻痺の重症度は歩行に関する最も強い予測因子であり、カットオフをグレード6（股関節の伸筋と屈筋の協調運動の能力）とした場合、感度は80.4%、特異度は100%であった。

【結論】発症3ヵ月の歩行可否における歩行予測因子としては、脳室穿破、麻痺の重症度、FIM認知項目が有用であり、Grade6以上、股関節レベルでの運動可否、FIM認知項目18点の可否が歩行獲得を左右するものと考えられた。